特集2

にいがた アートの世界へ ようこそ

豊かな自然に包まれ四季折々の美しさを満喫できるまち・新潟市は、多くのアーティストの活動を支える、芸術を愛するまちでもあります。人々はアートを通してふれあいながら新しい可能性を追求。その輪の中に新潟大学の学生も参加し、積極的に活動を行っています。今回は、新潟・市民映画館シネ・ウインドとうちのDEアートの活動を紹介します。

新潟・市民映画館シネ・ウインド × うちのDEアート

誰もが関われる市民映画館

新潟・市民映画館シネ・ウインド◎代表　齋藤正行さん

シネ・ウインドには核（リーダー）がたくさんいる、と語るシネ・ウインド代表の齋藤さん

新潟市内でも特に若者が集まる街・万代シテイに、新潟・市民映画館シネ・ウインドはあります。ここでは大型映画館では上映されないような隠れた名画や企画者こだわりの作品などを次々に上映。映画を見て楽しむだけでなく、さまざまな活動を通して映画と関われるシネ・ウインドには、新潟大学の学生の会員も少なくありません。映画館誕生のいきさつや活動内容について、シネ・ウインド代表の齋藤正行さんにお話を伺いました。

齋藤さんが感じる映画の「面白さ」とはなんでしょうか。

齋藤●35ミリフィルムを1秒間に16コマの速さで見せること。さらにフィルムをカットして編集すると思いがけないストーリーが生まれるところですね。編集することによって、時間と空間を一気にリアルに飛べる。映画以外の文学や美術などでも表現はできますが、時間と空間を総合的に表現できるのが映画だと思います。例えば花が咲いているカット。次のカットで枯れていたら、見ている側はその間に何があったのかを想像します。イメージの参加をすることになるわけです。

新潟・市民映画館シネ・ウインドを始められたきっかけをお話しいただけますでしょうか。やはり映画がお好きだったのですか。

シネ・ウインド発
文化フォーラムマガジン
『月刊ウインド』

齋藤●映画が特別に好きだったわけではありません。確かに高校時代はその頃「名画座」といわれていた「ライフ」という映画館に通ったりしていて、映画は日常の一部でした。しかしそれは特別なことではなく、当時の高校生はみんなそうでした。

その「ライフ」が1985年に閉館することになった時、映画評論家の荻昌弘さんが「新潟にそういう映画館を維持できないのは貧弱な町だから」というような話をされました。私は、新潟はいい町だからここで死のうと思って女房と子どもを連れて帰ってきていたのです。なんだか新潟を馬鹿にされたような気がしました。

映画館「ライフ」をご自分で運営したいと考えたのですか。

齋藤●「ライフ」の経営者に会いたくても、全く会ってくれませんでした。いろいろ調べてみると、自分が思っていた名画座「ライフ」と現実の映画館「ライフ」は違うのだということがわかりました。

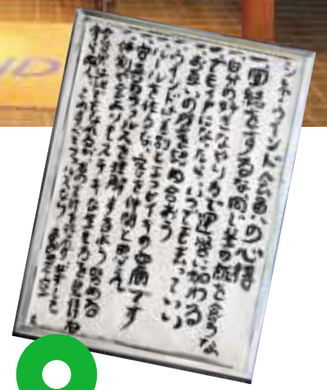
それがシネ・ウインドをスタートさせるきっかけになったのですか。

齋藤●その頃、ビデオデッキの普及やレンタルビデオ店の進出などの影響で、全国に7,000館あった映画館が1,500館ぐらいに減っていました。そこで、たとえ儲からなくても、良い映画を上映できる映画館をつくりたいと思いました。どんな方法ができるか勉強し、その頃イギリスから出てきたNPOという活動方法も参考にして、自分の考えた案を持って県や市に相談に行きました。しかし、誰も理解してくれない。「前例がないとできない」「そんなにやりたいならイギリスに行ってやればいいじゃないか」と言われる始末。「これは自分でやるしかないな」と覚悟を決めて、勤めていた印刷会社に辞表を出して、1985年5月に事務所を開きました。

シネ・ウインドは、新潟伊勢丹向かいの万代シテイ第2駐車場ビルを入ってすぐ

どんな映画館にしたいとお考えに。

齋藤●「市民映画館」にしたいということは絶対に譲らなかった。誰もがフィルムをまわして、誰もがお客さんになって、誰もが作品を組めて、誰もが関われる映画館。これは表のポスターに学生が書いてくれた言葉です。この形態は現在も変わっていません。シネ・ウインドを始める時はずいぶん怪訝そうに見られました。当初、「営利目的でない、そんな映画館はありえない」「みんなが参加するなんてどうやって？」といわれました。しかし、それまで見たことがないわけだから仕方がない。そんな中で映画について勉強をし、疑問に思ったことは一生懸命考えて、オープンにこぎつけました。市民映画館の前例はないけれど、それでも人が集まってくる。「安全・安心」とよく言いますが、人間は危険で不安なほうが楽しいのかもしれない。生きるということはそういうことで、そうやって楽しむしかないのかなと思いますね（笑）。



シネ・ウインド会員の心得
これも学生ボランティアの手によるもの

シネ・ウインドには多くの新潟大学の学生も関わっていますが、具体的にどういう参加のしかたをしているのでしょう。

齋藤●映画を上映したいと思って来る人もいれば、見に来る人もいれば、手伝いに来る人もいる。自分がやってみたい、関わりたいということをやる。シネ・ウインドとの関わり方は自由です。ずっと関わっている学生もいれば、一つのことに関わって去っていく学生もいます。作家の中上健次さんに、「おまえのところは単純細胞の寄せ集めで、中心（核）のないアメーバ運動をやっているんだなあ」なんていわれました（笑）。「齋藤って誰ですか?」と、代表をしている私を知らないシネ・ウインド会員だっている。だから、「シネ・ウインドは好きなんだけど、あの齋藤が嫌だよな」というのもOK!　なんです。どういう人がどう関わっているかは関係ない。自分のやりたいことをやればいい。

シネ・ウインドの建物の外側に、ベルリンの壁の崩壊をきっかけにして壁をつくりました。この壁には隙間があります。これはシネ・ウインドの象徴のようなもの。壁はあるけど隙間から希求すれば、全てに応じようという場所。それがシネ・ウインドです。そして、人と人の間には見えない壁があるということを認め合うことが大切だと思います。そういう意味でつくった壁です。

シネ・ウインドの「隙間のある壁」

シネ・ウインドが将来目指している展望を教えてください。

齋藤●まだ道半ばですからね。今から22年前、シネ・ウインドのオープニング・パーティの時にだるまが用意されていました。だるまの「両目を開けろ」といわれて、私が「半世紀後に開眼しようと思う」といったら、みんなに笑われました。オープンするといっても3日もつか3カ月もつかもわからないのに、なにを言っているんだって（笑）。

全てについていえることは、1年で結果なんか出ないし、もし結果が出たとしても面白くないということ。あの22年前に比べると周りの見方も変わってきているのは事実です。もう一度原点に帰って再発見することも大事だと思っています。

学生に聞く！

新潟・市民映画館シネ・ウインド

人文学部4年　松沢佳苗（長野県上田市出身）

新潟大学に入学し新潟市に住むようになって、シネ・ウインドの存在は知っていましたが、直接関わるようになったのは最近のことです。国際協力に興味があって、ボリビア映画の特集があるからと知人に声をかけられて見にきたのがシネ・ウインド初体験。その後、『蟻の兵隊』を見たのがきっかけで会員になりました。昨年のことです。齋藤さんに初めて会った時の印象は、面白いおじさん。でもすごく影響を受けています。

シネ・ウインドでの活動のしかたは自由です。私も頻繁に来ているわけではありませんが、この場所に来れば自分なりの関わり方ができます。友達から「シネ・ウインドでボランティアをやりたいので紹介して」といわれることがありますが、「とにかくこの場所に来てみて」と話しますね。それが市民映画館シネ・ウインドだと思います。

新潟・市民映画館シネ・ウインド

1985年12月にオープンした新潟独自の「市民映画館」。運営は会員の手により行われており、会報『月刊ウインド』の編集や上映作品の選定、各種資料の保管・管理などに多くの会員有志が精力的に活動している。

新潟市中央区八千代2-1-1
万代シテイ第2駐車場ビル1階
TEL025-243-5530
http://www.wingz.co.jp/cinewind/

特集2

ART にいがた アートの世界へ ようこそ

学生と住民が作り上げるアートプロジェクト

うちのDEアート ◎ 教育人間科学部 教授 山本眞也 ◎ 大学院教育学研究科　2年 上林夢子

うちのDEアートは、新潟市内野町を舞台に2001年、2003年、2005年と、3回にわたり行われてきたアートプロジェクト。
芸術の新たな可能性の模索と地域の活性化を図ることを目的に開催。新潟大学の学生と内野町住民が中心となり、長期的に町の中で交流をもちながら活動してきました。アートを媒体にした人と人とのつながりは、回を重ねるごとに広がりをみせています。
そして、新潟市が政令指定都市に移行した今年の秋は、エリアを内野町から西区へと広げた「西区DEアート」に。地域の枠を越え、新しいつながりに結びつくアートプロジェクトを展開します。

内野駅前に建つ『Lotulilo=Meditation（瞑想）』

Lotulilo=Meditation

アートプロジェクトの舞台として、なぜ内野町が選ばれたのでしょうか。

山本●まず内野は大学に隣接する町なのでフットワークよく動けるというのがありました。それから内野が持っている町の魅力ですね。内野には新川や港があり、2003年には造り酒屋が4軒もあったという伝統の残る町です。学生からもっと内野の町を知りたいという声が上がり、開催地に決まりました。

学生は何名くらい参加していますか。また、実際にはどのような活動を行うのですか。

上林●2005年の3回目は約100名の学生が参加しました。活動としては、まず開催前年の10月、実行委員会を立ち上げます。それから招聘する外部アーティストの人選をしてアポイントをとり始めます。同時進行で文化活動に対してお金を出してくださる助成団体を探し、助成金の申請作業を始めます。また、内野町住民によって結成された『夢アートうちの』の方々との会議も行っていきます。そういう活動をしながら、学生たちは自分の作品の企画を進め、2月から4月初頭にかけて企画の選考会を行います。プロのアーティストの作品と一緒に展示する以上は学生もプロの意識で作品を発表しようということで、2005年は新津美術館や万代島美術館、県立近代美術館の学芸員の方々を外部審査員としてお招きし、いろいろなご意見をいただきました。

海外のアーティストも招聘されているそうですね。

山本●「アーティスト・イン・レジデンス」といって、海外から招いた作家が地域に滞在し、地域の人と交流しながら公開制作をするという企画です。2003年はニュージーランドの彫刻家を、2005年はイタリアの彫刻家をお呼びしました。イタリアの作家の方は新川脇の公園で制作していたのですが、毎日のように町の人たちや小学生たちが見に来て賑やかでした。その時制作した2作品は、1点は内野小学校の校庭とグラウンドの間にあるパブリック・スペースに、もう1点は小学校のグラウンドに設置されています。

上林●グラウンドに設置された『Friendship』という作品は、子どもたちともっと触れ合いたいと作家自身が言い出して制作したものです。内野小学校の子どもたちの手型を取って石に彫っています。

山本●町の人たちが制作風景を見たり、作家と交流したりすることで、うちのDEアートに対する住民の見方がずいぶん変わりました。もちろん学生たちにとってもすごく勉強になっていると思います。

西区DEアート
副実行委員長の
山本教授

内野小学校の児童たちの
手形が刻まれた『Friendship』

Friendship

活動している中で、嬉しかった出来事を一つ教えてください。

上林●うちのDEアートがある年もない年も私たちは内野のお祭りに参加させてもらっています。お祭りで町のみなさんと知り合うことができました。そこで出会ったおじさんたちは、普段はアートなんて興味を示さないのに、このプロジェクトで私が作品を出していると聞いてわざわざ仕事の途中に「見に来たよ」って寄ってくれたんです。これは嬉しかったですね。

それでは、苦労されるのはどういう点でしょう？

山本●内野の町には空き店舗や空き家が結構多いのですが、そういう場所を企画の会場として使いたいと交渉すると難色を示されるのが多いことです。場所の交渉は予算の次に苦労するところですね。

上林●よく先生方は「学生が交渉した方が、話が通りやすい」といいますね。特に女子の学生が（笑）。学生に対して町の人たちは、自分の孫が来たような気持ちで受け入れて、手を貸してくれます。内野は職人さんも多いので、例えば「セメントを使いたい」という話をするとセメントの塗り方を教えてくれたりとか、大工さんも自分のところの機械を使ってもいいよといってくれたりとか、一度仲良くなるととても協力してくださいます。

回を重ねるうちに内野の人たちとの交流も深くなっていったのですね。

山本●2003年と2005年に行われた『暖簾路』という企画があります。これは、小路に面する家を企画者が訪ねてその家の歴史などを伺い、家紋を染め抜いた暖簾を作って玄関にかけてもらうという企画です。開催期間中は何十もの暖簾が軒先に並んで圧巻でした。すると、それを見ていた町の人から「次はうちの暖簾を作ってくれるんだよね」と言われたそうです。これを企画した学生は卒業したのですが、私は継続プロジェクトにするのも面白いと思っています。

今年は「うちのDEアート」から「西区DEアート」に変わるそうですね。

山本●2007年に新潟市が政令指定都市になるということで、アートプロジェクトの範囲を内野から西区にまで広げてできないかというオファーが、新潟市からあったのです。

西区DEアートではどういう企画を予定しているのですか。

上林●今回は寺尾中央公園でのワークショップを企画しています。西区内の小中学校全てに声をかけて、美術教育の研究室の学生が考えたいくつかのワークショップの中でやりたいものがあれば参加していただき、その学校が作りあげた作品を寺尾中央公園に設置します。その他にも浜辺に作品を展示するなど、内野町という枠にはとらわれない企画を予定しています。

最後に、西区DEアートへの意気込みをお願いします。

山本●今回は招聘アーティストが13名と多数参加するので、どういう展開をしてくれるのか楽しみです。それから私たち教員も学生を指導するだけではなく、それぞれに今までにない企画を考えたいと思っています。うちのDEアートのこれまでの経験をもとに新しい試みをしていく予定です。期待してください。

上林●企画者の一人一人が前回よりも面白いものをと意識して進めていくと思います。一つ一つの企画も本当に個性豊かで、絵画もあれば彫刻のようなものもあったり、来場者が直に参加できるようなものもあったり。いろいろと楽しめるようになっています。ぜひみなさんに来ていただきたいです。

『Meeting Point』は
内野小学校のグラウンド近くに
設置されている

Meeting Point

学生実行委員長の
上林さん

特集2
ART
にいがた
アートの世界へ
ようこそ

アートクロッシング2007にいがた
西区DEアート

■開催期間
10月13日(土)～28日(日)　10:00～18:00

■開催地
新潟市西区内野町～寺尾中央公園周辺

■問い合わせ
西区DEアート実行委員会
西区アートプロジェクト2007

新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学教育人間科学部　橋本研究室
TEL 025-262-7061　E-mail ni_art07@yahoo.co.jp
http://www.ed.niigata-u.ac.jp/~ni-art07